

女の一生

(上)

山本有三

おんな 女 の 一 生 (上) いつ

新潮文庫

草 60 = 2



昭和二十六年三月十日 発行
昭和五十九年二月十五日 六十五刷

著 者 山^{やま}本^{もと}有^{ゆう}三^{ぞう}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

◎ 印刷・三晃印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社
© Yûichi Yamamoto 1951 Printed in Japan

ISBN4-10-106003-7 C0193

新 潮 文 庫

女 の 一 生
上 卷

山 本 有 三 著



新 潮 社 版

目次

糸きり齒	七
婚約のゆび輪	二三
そろそろ心	四三
開かれた絵ほん	六六
結婚	一七
勝敗	一五二
虚空に美酒を献ず	一七三
雨が降り	二八
第一の出産	二六一

女の
一生

第一部

糸きり歯

一

允子（マサコ）は青い草の上にすわって、こゝろもちはれあがつた左のほおをおさえながら、あお向いて、大きな口をあけていた。が、上を向いていると、空の緑が目にしみるので、彼女のまぶたは、ひとりでにふさがっていた。野の風が、おさげのリボンを軽くゆすぶった。うしろの大きな松のこずえで、うるさく鳴きしきっている油ゼミの声が、うずく歯にちりく響いた。

允子の開いた口の上に、昌二郎（ショウジロウ）のほそ長い、白い顔がかぶさっていた。彼は人の口のなかを、こんなにはつきり見たことがなかった。口のなかって随分きれいなものだなあ、と思いながら、彼はサクラもちのあんを抜いてしまったあとの、あの柔かいモ、色のしん粉の皮を、すぐに連想した。あんを抜いた、モ、色のふわくしたしん粉の内がわに、まっ白いアルヘイ糖を上下にずらりとならべたのが、なんのことはない、允子の口のなかだった。彼は、即座にたべてしまいたい衝動を感じた。

「何してんの。早くやってよ。」

允子は口をあいたまゝ、いった。

昌二郎は空想を破られたので、急にどきまぎしながら、持っていたクギ抜きを、なんということなしに、二三度がちくく鳴らした。

「どれだかよくわかんないんだよ。」

「これよ。——これだって、さっきからいつてるじゃないの。」

允子は人さし指のさきを、痛む歯の上に持って行った。

「そら、こんなに動いてるじゃないの。」

「あ、そいつか。ずいぶん動くね。」

「動くだろう。こんなにぐらくくしてるんだから、すぐ抜けるよ。——自分じゃ、どうしてもぐいとやれないから、昌ちゃん、やってよ、早く。」

「よし。——これだね。」

昌二郎は指で、下あごのおく歯の一つを押した。

「うゝん。」

允子は「わかんない人ね。」という顔をしながら、昌二郎の指を払いのけ、口を曲げながら、ことさら、糸きり歯を彼のほうに突きだして、指さきでこれだと示した。

昌二郎は彼女のおさえている指の上に、自分の指をのせた。そして、彼女が指を引っこめたと同時に、クギ抜きを、その歯にあてがった。

「痛くない。」

允子は黙って首を動かした。

「いゝか。引っばるよ。」

彼は力をいれて引っばった。しかし、はさみ方が悪かったせい、引っばるや否や、がちやり

とはずれてしまった。

「痛くない。」

「痛くないってば。」

允子は、口のなかにたまったつばを吐きだしながらいった。

「でも、痛そうな顔してるんだもの。」

「そりゃ痛いよ。齒を抜くんだもの。だけど、それくらい我慢するから、思いきってうんとやって……」

昌二郎はうなずいて、クギ抜きをはさみ直した。そして、もう一度ひっぱったが、今度もすぐはずれてしまつて、うまくいかなかった。

「允ちゃん、抜けないよ。まだ早いんだ。」

「早かないよ、ちっとも……」

「こんなことしなくつたって、ほっとけば、ひとりでに抜けるつたら……」

「いや、あたし。齒のぐらく／＼してるのなんか。——だめね、昌ちゃんは。」

「だって、うまくはさまんないんだもの。」

「はさまっても、ぐっと引っぱれないんだろう。——こわいの、昌ちゃん。」

「そんなことあないけれど、おらあ、いやだ。——いろんなこというんなら、自分で抜いたらいいじゃないか。」

「自分でできれば、頼みやしないじゃないか。昌ちゃんは弱むしね。齒も抜けないなんて。」

「おらあ、齒医者じゃないよ。」

昌二郎はクギ抜きをあいだに、自分の親ゆびをわざとはさんで、ぐいと締めつけながら、しかめ顔をして、つつけんどんに答えた。

「だれも、あんたを齒医者だなんて、いってやしないじゃないの。男のくせに、力がないって言ったんじゃないの。」

「そ、そんなこというんなら……」

「そんなこというんなら、何？」

「そんなこというんなら、ほんとうに、ぐんと引っぱってやるぞ。」

「え、引っぱってちょうだい。思いきり、ぐうんと。」

「泣いたって知らないよ。」

「あ、いゝとも。」

「ほんとうだよ。ほんとうに力いっぱい引っぱるんだよ。」

「あゝ、いゝってば。どんなに引っぱったって。」

二

そこで、允子はまた大きな口をあいて天上を向き、昌二郎は大きなクギ抜きをかまえて、彼女のわきに立った。彼は指の先で、ぐらくする齒をたしかめてから、おもむろにクギ抜きを差しこんだ。前には、いつも、はさみ方が浅かったためにはずれてしまったから、今度はできるだけ

深くおさえて、クギ抜きに、充分ちからがはいるようにくふうした。

「いゝかい。引っぱるよ。」

「あゝ。……」

允子の返事は、口をあいているので、はっきり聞きとれなかった。

昌二郎は、軽くおさえていたクギ抜きのもとを、ぎゅっと締めて、力いっぱい引っぱろうとした。すると、その途端に、

「あ、いた、た！」

と、突然允子は悲鳴をあげた。

「なんだ。もう泣くのか。」

男の子は勝ちほこったように、允子を見おろした。允子のほおには、白い水たまが二、三滴、ぽろぽろころがっていた。

「そうれ見ろ。だから泣くっていうんだ。」

「だ、だって……」

允子は泣きながらいった。

「肉をはさむんだもの。……肉をはさまれれば、だれだって痛いじゃないの。」

彼女は昌二郎をにらみつけるような顔をしながら、人さし指の先を口のなかに持って行った。

「そら、こんなに血が出たじゃないか。意地わる！」

允子は指の先の赤いものを、彼の前につきつけた。

「わざとやったんだろう。あたしを泣かそうと思って……」

「わざとなんかやりやしないよ。はずれないように深くはさんだんで、じゃ、肉にさわったんだ。」

「そんならもう一度。今度は肉をはさんじゃいやだよ。」

「大丈夫だよ。」

昌二郎はクギ抜きをはさみ直して、もう一度やった。クギ抜きがうまく歯にかゝったと見え、歯の根のあたりで、もりっという音がした。彼はその音でひやつとしたので、引っぱるのを急にやめてしまった。

「痛くない？」

「うゝん。」

允子は涙をぼろ／＼こぼしているくせに、「うゝん。」といった。

「また少し血が出たね。」

「大丈夫だよ。」

「ほんとうに痛くない？」

「痛くないってば。——もうちっとだから、ぎゅっと引っぱって。」

「大丈夫かい。」

「大丈夫だってば。」

昌二郎はふたゝびクギ抜きを糸きり歯にかけて、もり／＼やった。もり／＼やっている内に、

何か、ごきんと音がしたような気がしたが、その瞬間に、允子は急に、

「あゝん！」

と、とてつもない声をはり挙げたと思ったら、いきなり昌二郎のからだにぴったりしがみついてしまった。しがみつくと同時に、下あごのあたりを、ぐいぐい彼の胸にこすりつけてきた。昌二郎はびっくりして彼女を見た。彼女の口のはしから、つばといっしょに血が流れていた。彼はいよくびっくりして、クギ抜きを投げだしたまゝ、允子をいたわった。

「どうしたの。——痛かった。また肉をはさんじやったの。」

「……………」

「え、どうした。——ごめんね。允ちゃん、ごめんね。」

允子はなんにも答えないで、泣きながら、一層つよく彼の背なかの肉をつかんだ。

と、何かわからない力が、昌二郎の体内にわきあがった。彼の両うでは、突然彼女の肩をぎゅっと締めつけた。そうしたら、允子は前よりもっと声をはり挙げて、ほおをすり寄せてきた。すり寄せられると、昌二郎はいよく堅く彼女をだき締めた。

うしろの松のこずえでは、あい変わらず油ゼミが鳴きしきっていた。

緑の草の上には、ちいさい白い、とんがったものが、水晶のように光っていた。

三

それから二、三日のちのことだった。允子は口のなかに指をいれて、昌二郎のうちのほうへ遊

びにいった。歯を抜いたあと、そこところから、口のなかに風がすうくはいるので、彼女の指はいつのまにか、そのすきまにはさまってしまうのだった。

彼の家のそばの、かきねの近くまでくると、

「允ちゃん。」

と、昌二郎の声がどこからともなく飛んできた。彼女はあたりを見まわした。しかし昌二郎はどこにもいなかった。

「允ちゃん。」

また声がした。しかしいくら探しても、どうしても見つからなかった。

「どこ、昌ちゃん。——どこに隠れてるの。」

「こゝだよ。こゝだよ。」

枝をかさ／＼動かす音がしたので、允子にもやっとなかった。かさなったビワの葉のうしろに、昌二郎のイガグリあたまが、リスのようにちよっぴり見えた。

「なんだ。そんなところにいたのか。」

「允ちゃん。手をだしなよ。」

シャツ一枚で登っている昌二郎が、木の上から叫んだ。

「なんだい。」

「ビワをやるよ。」

「ビワ？」

「うん。」

「もうたべられる。」

「たべられるとも。うまいぜ。手をだしといでよ。今もぎってやるから。」

昌二郎はうまそうなのをひと枝もぎって、ぽうんと下に投げた。しかし允子はおもうともしなかった。

黄いろい果実は、乾いた土の上でぐちゃぐちゃに割れて、なかみを見せたまゝころがっていた。

「どうして取らないの。」

「あたし、こじぎじゃないよ。投げたものなんかいやだ。」

「そんなこといったって、うまいんだぜ。とても水があるんだよ。」

「いらないうたら。」

「ふん！ いばってやがら。口んなかに指つつこんでるくせに。」

允子のはつとして指をだした。

「だって、抜いたあとが、歯を抜いたあとが、へんなんだもの……」

「やあい、歯っかけばあさん！ 歯っかけばあさん！」

急に木の上の子どもが、はやしだした。

と、允子は昌二郎の登っている木に、やにわに飛びついた。

「おい、いけない。そんなとこで木を動かしちゃ……」

「動かすんじゃない。あたしも登るんだよ。」